

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月30日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008年度～2011年度

課題番号：20530840

研究課題名(和文) 津軽ねぶた・ねぶたの教育化～調査研究とカリキュラム開発～

研究課題名(英文) The Research and Development of a Curriculum based on the Nebuta Neputa Festivals of the Tsugaru Area

研究代表者

大谷 良光 (OTANI YOSHIMITSU)

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号：40333702

研究成果の概要(和文)：多くの青森県民が参加する津軽の伝統文化であるねぶた・ねぶた祭。本研究はこの祭に子ども、学校等がどのように関わっているのかを明らかにし、学校が地域と連携して祭を授業に取り込む場合のカリキュラム開発を目的とした。下記の調査、①子どもの意識・関わり調査、②学校の取組調査、③祭運行団体の学校関わり・意識調査、④祭り実施校への継続訪問調査の検討から、祭を教育課程に位置づける地域的環境が整っていることが判明した。そして、多様な学年が取り組むことができる汎用「だるまねぶた」と指導計画を開発した。

研究成果の概要(英文)：Every year a large number of residents of Aomori prefecture take part in the traditional Nebuta and Neputa festivals of the Tsugaru region.

This research investigates how local schools and children are getting involved in these festivals, how schools and the local community cooperate and introduce a curriculum from which festival-related class-based activities in schools can be implemented.

Research Areas:

① The level of children's awareness of the festivals and the level of involvement of children in the festivals.

② The initiatives that schools are taking to include the festivals into the school curriculum.

③ The level of awareness of the relationship between the festival organizers and schools.

④ Observations of repeated visits to schools that actively partake in the festivals.

The results of these enquiries are promising and indicate that there already exists a good environment for study of the festivals to be introduced into school curriculums.

As a result an easy to use, general purpose "Daruma Nebuta" teaching plan has been developed for students of all ages and abilities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：地域と学校との連携、地域の伝統文化と学校教育、行事のカリキュラム開発、津軽のねぶた・ねふた祭り

1. 研究開始当初の背景

ねぶた・ねふた(以下「ねふた」と省略する)は、津軽人の誇りであり地域の貴重な伝統文化で、津軽地方の各市町村で行われている。また、「ねふた」は地域での行事のみでなく、学校において学校内運行や、地域運行を独自に行い、学校行事として伝承しているところも少なからず存在する。これら「ねふた」の制作や運行を行っている教育実践は、地方新聞に掲載されることが多い。しかし、「ねふた」が学校教育とどのように関わっているかの先行研究はない。

2. 研究の目的

本研究は、学校が地域を再創造していくために「地域づくり」の一環として「ねふた」を位置づけ、子どもの「ねふた」に対する意識や、学校の「ねふた」への関わりを明らかにし、学校が地域と連携し教育課程を編成する場合の資料として活用するためのカリキュラムを開発し、津軽の子どもたちの人格形成の一端に寄与し、「ねふた」の普及に貢献することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の目標は二つあり、それを達成するため期間前半が調査研究、後半が学校での「ねふた」制作等のカリキュラムを開発し、その普及に取り組む事であった。

(1) 「ねふた」と学校教育との関わりを明らかにする調査研究

① 「ねふた」への子ども意識に関する調査と祭りへの子ども関わり調査

② 青森市他3市の小・中学校に限定し、学校として「ねふた」を運行している実際と、学校教育で取り上げている「ねふた」に関わる教育課程・教育内容等に関する学校の取組調査、

③ 青森市と弘前市の「ねふた」祭運行団体が学校の「ねふた」の取り組みに対してどのように関わっているか、また・関わろうとしているかの意識調査、

④ ②の調査で明らかになった祭り実施校への継続訪問調査

(2) 学校での「ねふた」制作等のカリキュラムの開発とそれらの普及

① 前半の調査結果から校種別カリキュラムを構成する。

② モデル校での実験授業を行い、カリキュラム評価を行う。

③ 普及のための冊子を作成し関係者に配布するとともにマスコミを通して県民に幅

広く報告する。

4. 研究成果

研究成果の概要を、研究方法を踏まえて報告する。

(1) 「ねふた」と学校教育との関わりを明らかにする調査結果

①-1 「ねふた」の子ども意識調査

小・中・高校生の8割以上は、「ねぶた・ねふたが世界に誇れる祭り、日本有数の祭り」と思い、「古くから伝わる祭りを大切にし、自分たちの子どもに伝える必要がある」と考えていた。そして「学校の授業・行事に祭りや制作を取り入れたほうがよい」と5割強の子どもが考え、高校生を含め2割の子どもが「ねぶた師・ねふた絵師になれるらばなってみたい」と思い、4割の子どもがラッセランドや制作小屋に出かけていた。

①-2 祭りへの子ども関わり調査(小4)

祭りの観覧率は97%、運行への参加率は70%で、その内の多くの子どもが青森ねぶたはハネト、弘前ねぶたは曳き手として参加していた。また、制作への関わりは、紙貼りが主であった。

② 学校の取組調査(青森市、弘前市、五所川原市、黒石市)

小学校では全市とも5割近い学校が何らかの取り組みをし、中学校も、平均して4割の学校が何らかの取り組みをしていた。また、「ねふた」に関する学習や講話を行っている学校は、小学校は全体で約2割が、中学校は青森市、弘前市で各1校のみで、他は実施していなかった。また、活動や練習のための教育課程での領域は、小・中学校とも「総合的な学習の時間」が多く、次に小学校は「PTA子ども会活動」で、中学校は「行事」であった。

③ 祭運行団体調査

大型ねぶた中心の青森市と地域ねぶた中心の弘前市ではその結果に異なりがあった。ただ、現在学校と何らかの関わりを持っている団体は約3割、学校からの要望があれば対応できるとする団体が6割、学校で「ねふた」を取り上げることに意義があると考えている団体が9割を超えていた。

④ ②の調査で明らかになった祭り実施校への継続訪問調査

各市で小・中・高等学校各1校に絞り、2年間継続訪問調査を行った。どの校も、「ねふた」の制作から祭り運行まで行っている学

校である。各校とも学校の伝統行事として継続し地域と連携し喜ばれていた。行事の推進者としての「ねぶた馬鹿」教師の役割が大きいことも語られたが、問題点として担当する教師の負担が大きく、年度における力の入れ方に異なりもある学校もあった。

(2) 学校での「ねぶた」制作等のカリキュラムの開発とそれらの普及

上記の調査から、祭りには子ども達が多数参加しているが、学校教育で取り上げているところはそう多くなく、ねぶた・ねぶた制作から祭参加まで本格的に取り組んでいる学校は極めて少なかった。活動しているところも「ねぶた馬鹿」といわれる「ねぶた愛好家」の教師・校長の奮闘により実施されているところが多く、また、学校は教育改革の嵐や、新学習指導要領（2008年版）による時間数の確保で、「ねぶた」を授業として積極的に取り組む余裕がないと思われた。

しかし、子ども達は「ねぶた」祭りや学校での取り組みを肯定的に考え、祭り運行団体も学校の要望があれば協力したいと考えており、地域の環境は整っていると思われる。学校に「ゆとり」と自由裁量の時間が生かされ、予算的措置が取られるならば「ねぶた」への取り組みはもっと増えると考えられる。

上記の状況から「ねぶた」の校種ごとのカリキュラムを提示するより「汎用のカリキュラム」を提示することの方が妥当であると判断した。そこで、カリキュラムを構成し、大学生を対象に模擬授業を行い、その総括をへて、弘前市立北小学校の4年生を対象に開発した「だるまねぶた」の制作の実験授業（出前授業）を展開しカリキュラム評価を行った。

これらの成果（報告書）とそこから得られた知見を「提言」としてまとめ、青森市、弘前市に届け、記者会見で発表した。また、北小学校出前授業へのマスコミ取材を依頼し広く県民に報告した。さらに、冊子、大谷良光編著、『ねぶた・ねぶたと津軽の子ども・学校』を刊行し関係者に配布した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

①立田健太、佐藤紘昭、大谷良光、ねぶた祭りへの高校生の観覧・参加状況と祭りへの意識（思い）調査～ハネト若者離れ問題を焦点として～、査読無、弘前大学教育学部紀要No102、2009、105-114

②立田健太、大谷良光、大野絵美、青森ねぶた運行団体と子ども・学校との関わりの実際～大型・子ども・地域ねぶた運行団体を対象とした調査～、査読無、弘前大学教育学部紀要No102、2009、115-124

③三浦俊一、大谷良光、立田健太、弘前ねぶ

た祭り運行団体と子ども・学校との関わりの実状と意識、査読無、弘前大学教育学部紀要No102、2009、125-132

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

(1) 冊子の刊行

①大谷良光編著、『ねぶた・ねぶたと津軽の子ども・学校』、やまと印刷株式会社、2012、173

②弘前大学教育学部「ねぶた・ねぶたと学校教育」研究プロジェクト編、『青森ねぶた・弘前ねぶたへの子ども意識と祭りへの子ども「思い」調査 データ報告書と青森市・弘前市への提言』、2008、53

(2) 報道関連情報

①2012年6月記者会見（5/30現在予定）
「ねぶた・ねぶたと学校教育との関わり4市調査と最終報告書」

②2011年6月「弘前市立北小学校出前授業」取材

青森放送（RAB）、
東奥日報（朝刊）、陸奥新報（朝刊）

③2009年7月記者会見「ねぶた・ねぶたと運行団体調査の報告書と2市への提言」

NHK、青森放送（RAB）、
東奥日報（朝刊）、陸奥新報（朝刊）、
毎日新聞（朝刊）、河北新聞（朝刊）、読売新聞（朝刊）、朝日新聞

陸奥新報は社説「弘前ねぶた 学校と地域の連携を考えたい」でも紹介

④2008年7月記者会見 「青森ねぶた・弘前ねぶたへの子ども意識と祭りへの子ども『思い』調査の報告書と2市への提言」

東奥日報（朝刊）、陸奥新報（朝刊）、毎日新聞（朝刊）、河北新聞（朝刊）、読売新聞（朝刊）

(3) ホームページ情報

<http://siva.cc.hirosaki-u.ac.jp/usr/oootani/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大谷 良光 (OTANI YOSHIMITSU)

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号：40333702

(2) 研究分担者

蝦名 敦子 (EBINA ATHUKO)

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号：20302010

佐藤 紘昭 (SATOU HIROAKI)

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号：70249944

(3) 連携研究者

立田 健太 (TATHUTA KENTA)

青森県立青森工業高校講師、ねぶた師弟子

(4) 研究協力者

鎌田 沙穂 (KAMATA SAHORI)

弘前大学教育学部「ねぶた・ねぶたと学校教育」研究プロジェクト事務局長、学生

